

始まり

四年前、私が「幼児の教育」の編集のお手伝いをさせていただくことになった時、それは本当に「初めて」の「始まり」でした。ともかく月刊誌というのは月に一回は読者のお手もとに届くように、それも「いい加減」ではなく、できるだけ皆さんの希望にそい、それよりも、今成長しつつある子どもたちと大人とのよいかかわりを作るためということがまず大切な、すばらしい仕事なのだ、と思いました。でも、長い主婦生活で世の中を見る目の狭くなっていた私にとって、最初は、正直いって、「大変な仕事」でした。でも、周郷先生、津守先生、本田先生、そしてお茶の水幼稚園の諸先生

赤間峰子

方、さらに執筆者の方々は実に辛抱づよく私を見守って助けてくださいました。フレーベル館の方々も私のような脳の固まりかけた中年のおばさんを、よくぞ仕込んでくださいました。このごろではやっと、一冊の雑誌ができあがるたびに、「ともかく一生懸命やっただから……」と喜びを感じる余裕も出てきました。ふり返ってみて、「初めて」も「始まり」もなんとすばらしいことか！と心から思います。私のつい最近の経験、「動物園のおばさん」は、やはりまだ始めの段階です。小動物コーナーにモルモットとうさぎを出して、準備ができあがるころ

になると、午後ですと大体そのコーナーのまわりは、子ども連れの方たちで、ほほいっぱいになります。大抵最初は、遠藤先生が大きなラッパのついたスピーカーで一応の説明を、きびしい中にやさしくなさいます。ところが先日、どういうわけか「おまかせしますよ」と先生がさつさと事務所へ引き上げてしまわれました。その時の私の姿は今思い出しても哀れでした。ようすを察して「ヨーヨー」などと拍手をする不屈な中年男性もいて、私はすっかりあがって、声も引きつる始末……でも「私はひょっとしてまだまだ若いのかな」と思っただけでニヤリとしたひとときでした。